

フィリッピン「フク団」ゲリラ闘争の体験から

レス・ドブレは「革命の中の革命」のある個所で、マンスリー・レビューの編集者が、戦術資料の積み上げによらず、いわば時局予言に頼ったままで、ラテンアメリカの革命戦争に関する戦略的諸概念を定式化しようとしていることを批判している(マンスリー・レビューの一九六七年七月、八月合併号五九頁参照)ところがドブレ自身も、自らの依拠する経験に開きつつ、解釈を施しているのみならず、余りにも乏しい戦術上の経験に基づいて理論を構築することによって、結局は同様な眼帯をおかしているように思われるのである。

実質的には、ドブレは、フィデル・カストロにひきいられたキューバ・ゲリラ軍の戦術に対する自己の解釈だけに頼っている。たしかにキューバ闘争の指導は、革命指導のすぐれた実例であり、そこから多くの教訓を学ぶことはできる。しかし、それは、当然キューバの諸条件、すなわち闘争の成功に不可欠の特殊性と、全体性の文脈のなかで見なければならぬものである。

従来キューバ事情について、ドブレその他おおくの人びとが見落しつゝ、観察したりしがちであった諸特徴のひとつは、キューバ人民の組織経験と大衆闘争の背景であった。フィデルがその山中に立てこもったオリエンテ州と、彼が補給基地として利用したサンチャゴ・キューバは、ずっと以前から大衆組織活動が行われ、人民が革命運動になじんでいた地域であった。例えばそこではキューバの他の諸地方と同様に、共産主義者の組織活動が以前から行なわれており、キューバで作戦するゲリラ部隊はこの条件に頼ることができたのである。

◆ 大衆闘争の役割

「革命の中の革命」の二二頁に、ドブレは、フランク・ライスに宛てた一九五七年七月二十一日付けのフィデルの手紙を引用しているが、その中でフィデルは、農民が彼の軍隊に与えた支援を驚嘆して次のように述べている。「誰が彼等をおおくの見事に組織したのか。かくもおおくの能力と発奮を、勇気と自己犠牲を彼らにどこから得たのであるか。誰もそれを知らない。其はほとんどの一つの奇跡である。彼らはまったく自分たちだけで、自発的に自らを組織するのだ」ところでこの奇跡は、キューバの農民と労働者が組織活動の未経験者ではなかったという事実によって、説明がつくのである。

大衆組織の経験と大衆闘争というこの問題こそ、ドブレが繰り上げた理論の根拠に欠けている一本の糸なのである。なおこの問題と並行して、武力闘争などと否々を問わす、終ての革命的闘争の事前にも最

中にも、人民にこの経験を伝えることを助けるという、政党的役割の問題が欠落していることは、どうもでない。

私もドブレと同様、自己の限られた知識に頼らざるを得ない。(本を書いた時のドブレの経験は、おまけに、彼の直接経験ではなかった)それはフィリッピンにおけるたった一つの武装ゲリラ闘争に参加した時に得た知識に過ぎないのだ。したがって私は、私の見解をひとつの理論として、おおくの他の経験と併せ考慮すべき一線として提示するのである。

◆ 大衆的基盤のない地域で敗北

フィリッピンにフク団運動として知られる革命運動は、党の指導する運動であった。彼等にはフク団(国民解放軍)は一応党から分離した武装大衆組織ではあったが、両者は相互に連繫し、作戦命令は党から出たのである。第二次大戦の日本占領期間中に作られたフク団(当時抗日国民軍と呼ばれていた)

は古典型的な組織形態をとって低地帯の市区に居住する民衆に正しく基礎を置いたそれは中部ルソン島諸州の戦前の農民組合のうえに築かれ、事実上多数の党幹部のみならず、軍部部の全部がこれらの組織から出て来たのであった。こうした背景がなかったら、人民のゲリラ軍は生れ得なかつたであろう。このことは、大戦中フィリッピンに現れた他のおおくのゲリラ部隊の性格によって立証されるのであって、米軍またはフィリッピン正規軍の指揮下にあったそれらの団体は、人民を組織することをせむに、ときには半ば山賊的な態度で、人民の上にはまはっていたのである。

フィリッピンに経験がドブレ・テーゼの見地から、大いに検討されてしかるべきは、実にこの点であるといふのは、そこには彼の理論の幾つかの側面が露呈しているからである。武装勢力がフク団運動を担う機関として利用された、チェ・ゲバラやドブレの提唱するコマラ(小隊組織)に似た、三十名ないし六十名の男子と数名の女性からなる工作部隊が、山越えで他の諸州に送りこまれた。基地、すなわち大衆が運動の味方につくような地域を作り出すためであった。「行動による宣伝」という概念も露呈された。それは、駐留部隊に対してであれ

待ち伏せ攻撃によってあれ、敵に対する軍事攻撃は、大衆を味方に引き入れる近道だとする考えであった。実際ある土地に、われわれの武装部隊が現れ、年久しく君臨して来た政府軍や地主軍に、軍事的挑戦を行つたというだけで、大衆をわれわれの側に結集するのには有効だと信じられていた。

しかしこの方法には限界のあることがわかって来た。政府側は、これに対して大々的に武装部隊を増強したり、同一地域に常駐せしめたりするようになり、結局はわが方の兵士たちの影響力を、消してしまつてしまつたのである。「行動による宣伝」も、政府軍がゲリラ軍に対して壊滅的な勝利を収めた時には、逆効果を生ずる可能性があり、実際にそれはしばしばあつた。

それらに「農民の「自衛」という概念も決して用いられず、考慮されもしなかつた。試みて成功したのは、強大な敵軍の駐屯している地方においても機能できるような、地下の大衆組織であった。したがってフィリッピンの場合には、武装ゲリラは政治的な組織部隊とは見なされず、全体としての運動の戦術的当部隊と考えられたのである。工作部隊はすべて、新しい市区町村を組織する任務を持った、政治工作班の幹部を擁護するために編成された。彼らはかならず身用武器を携行し、いつでも自分の身をを守る用意があつたが、兵士ではなかつた。そして彼らが工作地域に建設しようとするキャンプや移動本部は、護衛部隊をつけてほしいにもかかわらず、軍の宿営地から隠された。ときどき武装部隊が区を包囲してなかに入り行き、宣伝の集会を開くことはあつたが、民衆との接触を確立できず、核を養成し、可能なところではそれを拡大して行つて、完全に組織された区に交する責任を負つた。党の政治委員である(連帯者)知事以上の防衛は、住

補充もなされはしたが、基本的な一つの手段は、地方の指導者を養成するための政治学校や講座を設けることであつた。そして経験上、このことは、党組織のなかにあつて、そのような任務のために訓練された人びとによって、初めて適切に遂行されたのである。ちなみにドブレは、ゲリラが村に入り、出て行ったあとには、細胞が確立されていなければならないといっているが、これは、未経験の住民を組織し、指導し、忍耐強くこれを発展させる任務を担うべきであるか。これは、そのための訓練を受けた党幹部によってなされねばならないといふことをわれわれは知つたのである。(ついでながら、都市の労働組合でいかに経験を積んだ幹部は、この仕事ですぐれた成果をあげた)

ドブレは、ゲリラ軍とは「党の第一であるべき」とする彼の中心論を論議を強めさせるにあつて、「肉体的適性は他の一切の適性に先行する前提条件」として、その所論を、生物学的根拠に還元してしまつている。フィリッピンに経験では過剰的

員よりも、はるかにより、フク団のゲリラ生活のきびしさにたえた人が、五十代のなかには多数いたし、六十代のなかには少数はいたのである。

フク団の運動にも、ゲリラが一般民衆(われわれはこれをシビランと呼んだ)と接触することによって生ずる危険については経験があつた。もちろんゲリラにとつて危険があつただけでなく、民衆にとつても危険があつた。しかし、危険のない闘いはないのであつて、われわれの見たとおりでは、これらの危険と、それに伴つた苦痛とに對するなかで、民衆は組織と闘争の経験を積んだ。われわれにとつて、闘いはそれが全人民の闘いとなつた時に、初めて真の意味を持ち得たのである。

ドブレ「革命の中の革命」の検討

ウイリアム・J・ポメロイ

だが、その原因は一つとして、私がいまこのへてきたような、運動全体の組織構造と組織形態にかかわりのあるものはなかつたと思ふ。敗北がおこつたとき、それはまず、大衆的基盤が革命的な意味で成熟するにいたらない工作地域でおこつた。そこではフク団の各部隊を孤立させて撃滅することが極めて容易であつた。そして一旦これらの部隊(通常大部分が他の地方から来た工作隊からなつていた)がせん滅されると、闘争経験のないその地域は、ゲリラ軍を再建すべき意識分子を、地域大衆のなかから発展させることが出来なかつた。その結果闘争は、中部ルソン島諸州の、もとの大衆基地へと、次第に縮小して行つた。そこでは、フク団の武装部隊は決してせん滅されなかつた。そして何らかの形の武装闘争が、組織と闘争の経験のある大衆によって、たえず補充されつゝ、今日まで続いている。

フク団の闘争中に生じた一つ重大な原因は、何人かの傑出した幹部が、彼らのひきいる部隊の個人的な忠誠の対象となる傾向であつた。幹部がこれを育てたというよりも、むしろ彼らの軍事指導の大胆な個人的資質が、非常に大きい尊敬を集めたことによるのである。この尊敬は、指揮官もその一部であるはずの運動自体に対してよりも、むしろ個々の指揮官に向けられた。そのために、隊員たちは、正しい事にも間違つたことにも、指揮官の命令にしたがつたのである。党の指導がルー大であつたり、学校や青年会や政治教育が、なおざりにされているところでは、どこでもこんな事が起りがちであつた。隊員を個人によつても、全体としての運動と主眼に向けさせるために、

必要の大衆組織

この種の教訓によって、武装部隊と政治的闘争の間に、政治的に自覚した組織大衆の基盤を作ることが絶対必要である。運動は確信するに到つた。解放地区は作られなかつた。それは、非現実的であつた。

必要の大衆組織

この種の教訓によって、武装部隊と政治的闘争の間に、政治的に自覚した組織大衆の基盤を作ることが絶対必要である。運動は確信するに到つた。解放地区は作られなかつた。それは、非現実的であつた。

必要の大衆組織

この種の教訓によって、武装部隊と政治的闘争の間に、政治的に自覚した組織大衆の基盤を作ることが絶対必要である。運動は確信するに到つた。解放地区は作られなかつた。それは、非現実的であつた。

必要の大衆組織

この種の教訓によって、武装部隊と政治的闘争の間に、政治的に自覚した組織大衆の基盤を作ることが絶対必要である。運動は確信するに到つた。解放地区は作られなかつた。それは、非現実的であつた。

必要の大衆組織

この種の教訓によって、武装部隊と政治的闘争の間に、政治的に自覚した組織大衆の基盤を作ることが絶対必要である。運動は確信するに到つた。解放地区は作られなかつた。それは、非現実的であつた。